

「絵本を資料に異世代交流を考える」 『リーベとおばあちゃん』

美谷島 いく子
Ikuko BIYAJIMA

はじめに

本研究は、高齢社会生活研究所での「高齢社会の成熟に関する研究－高齢者のエンパワーメントと生活の質の向上をめざして－」という研究の一部として、異世代交流グループの客員研究員として行ってきた研究であるので、高齢社研での研究の概要を記しておきたい。

①研究目的

少子高齢社会においては、高齢者も活力ある社会の担い手として期待されている。高齢期を単なる余生としてではなく、他世代との交流の中で社会の成員としての高齢者の役割が認識され生かされることが望まれる。

本研究は、高齢者のエンパワーメントと生活の質に関する調査研究を行うものである。衣食住・育児・世代間交流・文化伝承・生涯学習、情報リテラシー、介護などの多様な局面での詳細な実証研究により得られた知見を総合して「高齢者のエンパワーメントと生活の質の向上」についての提言を行う。そして、進展する少子高齢社会のなかで、その変化に対応して、人々が「意義ある生」を生き抜くことのできる生活のありかた、高齢社会の成熟の意義を探求し、その成果を地域社会に還元することを目的とする。

従来、本学で行った「高齢者の積極的生活態度の醸成と自立志向を支援する社会システムの可能性を探る」、「高齢社会におけるセルフイメージの確立と世代間交流」をテーマとした一連の継続研究の成果、すなわち、①高齢者は生涯発達し、積極的に生き得る活力ある人材であるということ。②世代間交流の中で相互に育ちあい、学び合う対象であること。③現在の社会においては、高齢者のパワーが十分に活かされていない現状であること。などをふまえた発展的研究として位置づけるものである。

平成13年度

1. 今までに蓄積された各分野のデータを「生活の質」の観点から見直し、要因分析を行う。
2. 上記で得られた結果を参考にして、高齢者の生活の実際的な場面に即して各分野毎にアンケート調査、面接調査、訪問観察、ビデオ撮影などを行う。

平成14年度

1. 各分野毎の調査の整理分析を行い、それらの結果を統合する研究会を通して、「生活の質」について総合的知見をまとめる。
2. その結果から、高齢者のエンパワーメントの実現と生活の質の向上の可能性を探る。

平成15年度

「高齢者のエンパワーメントと生活の質の向上」についての社会的支援のための提言を試みる。

各年度ともに、研究成果を市民対象の公開講座、公開研究会などにより地域に還元する。

②研究の特色・独創的な点

1. 高齢社会の全体像の把握

研究対象を高齢者に限定するのではなく、広く高齢社会の成員全体を視野にいれ、その関係性および社会システムを把握しようとする研究である点。

2. 多様な方法論にもとづく総合的実証研究

大規模な質問紙調査資料、面接調査資料や生活学、文学などの各分野で考案したユニークな方法による事例研究、縦断的個人追跡資料などを総合して実証研究を行っている点。

3. 生活の実際の側面からのアプローチ

本研究グループは、食物学、保健学、被服学、児童学、芸術教育学、文学、看護学、社会福祉学などの多彩なアプローチを行っているメンバーの参加を得ている。社会学的調査に加えて、生活の様々な側面から、ニーズに即した実践的な提案が可能である点。

4. 新たな高齢者モデルの構築に基づく研究

従来の研究の結果から得た、高齢になっても生涯発達し、積極的に生き得る活力ある人材であるという高齢者モデルの視点からのアプローチである点。

5. 高齢者のエンパワーメントと生活の質の向上をめざした新たな社会システム

高齢者が社会の活力ある一員として位置づけられる社会システムのモデルの構築のために、生活の各分野における実証的な研究を行い、高齢者のエンパワーメントの実現と生活の質の向上が、世代を超えた少子高齢社会の成員全体の生活の質の向上にもつながる点。

6. 研究成果の地域還元

昭和59年から行っている研究メンバーの様々な共同研究は、地元N市で、施策の基礎資料として活用され、メンバーの多くが福祉や生涯学習等各種委員会のメンバーや講習会講師として活動し研究成果を市民に還元することに積極的に取り組んできた。今後も、地域に密着した展開が期待される点。

③従来の研究経過・成果

1. 1983～1985年「高齢者の生活形態における変容傾向の家政学的研究」

地元N市において、高齢者の実態調査を行い、高齢者の個人的条件や時系列的变化による心的・物的な生活領域の縮小化現象がもたらす家庭生活全体の内的変容について、高齢者とそれを取りまく家庭環境との相互作用における動的関係を明らかにした。

2. 1986～1992年「高齢者に意義ある生活をもたらす要因に関する研究」

1993～1996年「高齢者の主体的な生活対応と社会的支援システムのあり方に関する研究」

1985年までの研究は、高齢者の心的・物的な生活領域の縮小化現象に着目したが、1986年からは、活力ある高齢者に焦点をあて、マクロなアンケート調査やミクロなきめ細かい訪問調査、面接調査および実践的な研究を行った。それらを総合して、①高齢者の積極的な生活態度の醸成は、可能であること、②高齢になっても生涯発達し得る事、③健康であることは大切であるが、たとえ病気があっても、普通の生活が出来れば生き甲斐を持って積極的に生き得る事④積極的な生活態度を持つ5カ国の高齢者に共通にいえることは、各種の社会参加をしており、人の役に立っているという意識があり、これからの目標やライフワークをもっていることである。⑤高齢者個人の主体的対応とともにこれを支援する社会的サポートが必要であり、現在はいまだ十分に行われていないこと⑥高齢者のパワーが社会の中で十分に生かされていないこと。⑦これらのことの達成には、個人の努力とともに、幼少からの教育が大切であること。などが明らかになった。

3. 1997～1999年「高齢社会におけるセルフイメージの確立と世代間交流—生活のインテグレーションを求めて—」

高齢期をより積極的に生きるためには、高齢者が孤立するのではなく、他世代との交流が必要であるとの観点からのアプローチである。国際比較調査、面接調査、詳細な自宅訪問調査、などを多彩な専門分野のメンバーにより、生活の多様な場面で行った。特に高齢者と幼児や短大女子学生との交流による実践的研究のなかで、相互の育ち合い、学び合いが見られ、高齢者の社会の成員としての役割が認識された。またコンピュータの講座のアシスタントを経験した短大学生の高齢者に対するイメージは、驚きと尊敬を持って変えられていった。各分野で実践を重ね、交流のなかでの意外な発見や経験もあり、新しい高齢者イメージや生活スタイルを明らかにすることが出来た。

④研究計画（含方法）

平成13年度

1. 高齢者の生活の実践的な場面に即した実態調査

蓄積された各分野のデータを「生活の質」の観点から見直しその結果を参考にして高齢

者の生活の多様な実際の場面における調査研究を行う。

- ①中高年のリズム体操実践者に対し、リズム体操の楽しさに関するインタビューおよび「Flow State Scales」日本語版をリズム体操に適用させるよう修正したアンケート用紙を用いた調査を行う。
 - ②異世代交流：高齢者が描かれたすぐれた絵本、児童文学を選び出し、それらの魅力が高齢者イメージをどのように形成しているか探求する。又、子どもは、高齢者との出会いの中で、どのように成長していったか探求する。
 - ③食の伝承：埼玉県N市および長野県N市在住高齢者の食文化伝承意欲とその実態を面接調査する。
 - ④施設入所者の栄養アセスメント：身体活動量、家族構成、年齢、食事の摂取状況、病歴、血液検査、QOL・ADLに関するアンケートなどを行う。
 - ⑤コミュニケーション財としての衣服：デイケアセンターに通う自力で移動出来る高齢者を自宅に訪問して衣生活について調査する。
 - ⑥情報リテラシー：今回は特に高齢女性の初心者に対象を絞り、女子大で情報科学を専攻する学生との異世代交流に基づく支援をはかる。受講者30名、学生のアシスタント10名の講座構成により、高齢女子が情報技術を習得する場合の問題点を洗い出す。
2. 国際比較調査：イギリス、ドイツ、デンマーク、スウェーデン、日本において本研究のメンバーが実施した積極的生活態度を持つ高齢者の生活と意識の調査資料を整理統合する。「生活の質」に影響を与える要因の分析を行う。
 3. N市調査：N市において実施した3回の「高齢者の生活の実態調査」の3934名の資料を整理統合する。地域における高齢者の生活の実態が5年毎にどのように変化したかを探り、生活の質の要因分析を行う。
 4. 調査成果の相互検討と共有
各調査の研究報告を行い様々な視点からの検討、討議を通して、それぞれの成果の相互理解を深め、共有をはかる。
 5. 研究成果の地域への還元：公開講座、公開研究会を行う

⑤今後の研究計画

平成14年度

1. 高齢者の生活の実的な場面に即した実態調査

平成13年度の実態調査補足的調査の実施とともに、高齢者の「生活の質」について検討する。

- ①リズム体操を継続している人々に対して、活動継続状況およびその動機を調査する。分

析の視点として内発的動機付けやコミットメントに関するアンケートを用いる。

- ②異世代交流：高齢者が登場する各国の絵本や児童文学から、文化の違いによって高齢者がどのように異なってイメージされているか、文化の中の高齢者像の相違を調べる。
 - ③食の伝承：高齢者と次世代、次の次の世代との交流による食文化伝承にみる実績と将来像を考察する。
 - ④在宅高齢者の栄養アセスメント：身体活動量、家族構成、年齢、食事の摂取状況、病歴、血液検査、QOL・ADLに関するアンケートなどを行う。
 - ⑤コミュニケーション財としての衣服：前年度に収集されたデータのケース分類を行い、それに基づき補足訪問調査を行う。
 - ⑥情報リテラシー：前年度行った講座から得られた問題点を勘案して、別の高齢女子の初心者に講座を行い実践的研究を行う。
2. 国際比較調査：5カ国を比較検討し、各国共通の事と相違することについて、各国の背景との関連において検討する。可能なかぎり、再度現地への訪問を行いたい。
 3. N市調査：N市において調査した3回にわたる「高齢者の生活の実態調査」資料の中、縦断的個人追跡資料を取り上げ、生活の質の変化を分析する。年齢の影響、個人差などを検討する。高齢者への段階的支援の方策を探る。
 4. 調査成果の相互検討と共有
前年度に引き続き月例の研究会を行う。
 5. 研究成果の地域への還元：公開講座、公開研究会を行う

平成15年度

1. 実態調査から得られた高齢社会における「生活の質」の現状をまとめる。
 - ①リズム体操の楽しさと活動の動機付けや継続との関連について、13年度および14年度の調査をふまえて分析し関連づけるとによって成果をまとめる。
 - ②異世代交流：絵本、児童文学は、子どもが読むものであり、そこに描かれた高齢者像は子どもたちに多大な影響力をもっている。未来社会のより良き高齢者イメージの創造をめざして、高齢者が描かれたすぐれた絵本、児童文学を子どもたちに語り聞かせ、子どもたちの考え方がどのように変化していくか調査する。
 - ③食の伝承：高齢者の食文化伝承における異世代交流から新しい食文化創造を通して生活の質の向上に寄与するための問題点を考察する。
 - ④施設入所者と在宅高齢者のQOLの比較を行い、また調査事項についてまとめる。特にグループホームに対する支援の方策を考察する。
 - ⑤コミュニケーション財としての衣服：生活の質の向上に寄与する衣生活における問題点をまとめ、多様な個性と心身の状況に応じた段階的対応を探る。

⑥情報リテラシー：情報弱者となる可能性の高い高齢者が、情報技術を容易に習得できるようにするためには、どのように支援すればよいか明らかにする。

2. 国際比較調査：5カ国の積極的生活態度を持つ高齢者の調査をまとめた結果から「生活の質」を向上させるための要因について考察する。

3. N市調査：横断的資料と縦断的資料の分析を総合して「生活の質」についてまとめる。

4. 調査成果の相互検討と共有

月例の研究会を継続し、メンバー相互の討議により成果の総合をはかる。高齢者のエンパワーメントの実現と生活の質の向上の可能性を探り、社会的支援のため、個人の心身の状態に応じた段階的対応の提言を試みる。

また公開講座や公開研究会により成果を地域へ還元する。

私は、以前、L. M. ボストンや A. P. ピアスのファンタジーを資料に「老人と子ども」の異世代交流を考えたことがある。^{(註(1))} 今回、絵本を資料とした理由を、しるしておきたい。

絵本は、子どものものだけでなく、大人も読んで感動する、深い語りかけのあるものが多い。私が発表した異世代グループの研究会の折、土曜日に、非常勤で出講している橋本潤子（元NHKアナウンサー）が参加して下さり、「リーベとおばあちゃん」を、見事に読み聞かせて下さった。その場にいた皆が、絵本を読んでもらう素晴らしさを、実感し、感動の時を持てたのは、幸運であった。

一度出会った絵本でも、年をとって、内面的に成熟すれば、より深く、その絵本と出会えると思う。更に、シンプルで、比較的読みやすい絵本は、老人にも向いているのではないか。

平成13年8月3日に、群馬県蕨塚本町の老人医療センターかさかけの里を訪れ、絵本の読み聞かせを客員研究員がするのを、観察した時、改めてその感をつよくした。

『リーベとおばあちゃん』作品論

『リーベとおばあちゃん』（ヨー・テンフィヨール作、ハーラル・ノールベルグ絵、山内清子訳、福音館書店）という、ノルウェーの絵本をとりあげた。原典の出版は1986年である。日本では1989年に翻訳出版されているが、今は絶版品切れである。

作品のヨー・テンフィヨール（Jo Tenfjord）は、1918年ノルウェーのオスロに生まれる。国立図書館学校の講師、作家、翻訳家、編集者として活躍。国際児童図書評議会の創設者の一人でもあり、ノルウェー国際児童図書評議会会長、ノルウェーユニセフ委員会会長などを歴任し、ノルウェー児童文学の第一人者。他に「森からのプレゼント」「ゆきとトナカイのうた」の原典などがある。

画家のハーラル・ノールベルグ (Harald Nordberg) は、1949年ノルウェーのオスロに生まれる。国立手工芸学校、国立教員養成学校で学んだ後、アメリカで舞台美術、彫刻を学ぶ。イラスト、デザインの分野でも活躍。絵本は、国際的にも高い評価を受けているという。

絵本のストーリーは、次のようである。

舞台は、ノルウェーの谷間の村、リーベランドという家族で営む典型的な農場。そこに、リーベという小さな女の子と、両親とおばあちゃんが暮している。極北にあるリーベの村は、冬になると、紫山の陰になって、お日さまが見えなくなり、陽光が当たらない。

リーベは農場の庭の中の、もうひとつの家に住んでいる。病気のおばあちゃんのお見舞いに、毎日行っており、おばあちゃんが大好きである。

おばあちゃんは、病気で、ベットに伏せており、春が来て、村に日が射すのを楽しみにしている。堇色のブラウスのボーを、きりっとリボン結びにした白髪のおばあちゃんは、その部屋の設いから、ベットの上で、本を読んだり、オルガンにあわせて歌ったりして過ごしている様子である。動けなくても、そこに居る丈でゆったりとして温かく、長い人生を生き抜いてきた知恵と、年を重ねた人のどっしりとした存在感のあるように形象化されている。

「出会う場面」

孫のリーベとおばあちゃんは、どのような異世代交流をしたのであろうか。絵本の中で、二人が出会う場面が二つある。図版(1)(2)

(1)

図版(1)

ひとつは、おばあちゃんが、リーベに、子どもの頃の復活祭の日の朝の、原体験を伝える場面である。祖母はリーベの方を見ながら、復活祭の朝、紫山から日の出を臨み、お日さまが踊る時、願い事をするという秘密の話をする。

窓際の祖母のベットの上には、リーベの小さな左手の上に、祖母の大きな右手が重ねられている。祖母の右手は、握られているのではなく、4本指を伸ばしてひろげており、手の甲がリーベのふくよかな手に触り、タッチし

ている形である。祖母は、孫に、物ではなく、秘密の原体験を、まさに手渡したのである。孫に若い時の原体験をしっかりと手渡した祖母は、未来に対して開かれた存在として、円環する時間に入ったともいえる。画面は丸型に描かれ、手前のブルーの椅子の上には、黒猫が前向きに座っている。この頁は、表紙絵にもなっている重要な場面である。(表紙では画面



は卵型に変わり、三ヶ月は見えなくなっている。)

その話を聞いた後も、祖母の病気は、なかなか良くならない。それで、リーベは、「お日さまが、祖母の所まで来て、祖母を元気にして下さい」と祈る為に、復活祭の日、紫山に登って、お日さまの踊りを見る決心をする。満月になるまで待ちながら、父親に連れて行ってもらふ約束をとりつける。リーベは、復活祭の早朝、寒さの中、父と紫山を、スキーで、頑張って登りとげ、お日さまが踊っているのを見ることができ、お日さまに願うことができた。

そして、リーベは、天に昇る陽光を受けながら下山するが、極北の地である為、太陽はリーベランドまで降りてくることができない。リーベは、思わず泣き出してしまおうが、父と戻り、紫山のギリギリに陽光が届く斜面に、ふきたんぼぼが、一面に金色に光って、咲いているのを見つける。リーベは、片手の手袋をとり、かじかむのもかまわず、素手で、両手一杯、ふきたんぼぼを摘み、黄色い小さな、「お日さまの子ども」のような花束にして下山する。

(2)

図版(2)



二人が出会う、二つ目の場面である。ここでは、リーベが、駆けてきて、ドアの所から、外で摘んできたばかりの、ふきたんぼぼの花束を、祖母の方に、両手で指し出しながら、部屋に入る瞬間を描いている。祖母は、ベット上に半身起き上がって、「待っていたよ」とばかりに、節くれだった大きな右手を広げている。「お日さまが見たいねえ。お日さまは、薬よりもなによりも、私達を元気にしてくれるもの」と言って楽しみにしていた祖母に、「小さなおひさま」の花束が届いた、感動的な瞬間である。部屋のドアは内側に開かれ、復活祭の日の、生氣あふれる外の空気も、祖母の部屋に入っているであろう。絵は、左と右の両頁に渡る横長の楕円となり、二人の間には、母親が、リーベの方を見て立っている。

リーベと父母の住む家の食堂には、カレンダーがかけられ、白いカーテンがかけられた居間には、青い花の植木鉢が置かれ、大きな時計が8時5分を指している。

別棟の祖母の部屋には、白いカーテンや茶色いテーブルランナーがかけられ、額に入った

絵や、黒く大きなオルガンが置かれたりと、清潔で豊かな感じがする。ところが、祖母の部屋には、カレンダーも時計もないことに気付く。何故であろうか。祖母は、リーベ達と、違った質の時間に生きている。つまり、祖母は、時計やカレンダーのように、水平に、刻々と流れてゆく、クロノジカルな時間からは、自由であることを意味する。祖母の部屋の窓からは、白い三ヶ月が見えるが、祖母は、月の満欠や、太陽の運行、即、月や太陽のめぐりによる季節の訪れに交響（共鳴）して、円環する時間の中に生きているのである。

二人の出会う二つの場面でも述べたように、「手」は、この絵本で、特に重要なキーとなる。病気でベットから離れて動けない祖母の心の動きは、この二つの場面で、手の動きに象徴されている。病気でねていた為か色は白いが、厳しい農作業をしていた大きく、節くれだった手である。その祖母の手は、リーベのやわらかい手に原体験を手渡した。

紫山へ登った時の、父のリーベを思いやる、細い心の動きも、父の灰色の手袋をした大きく厚い手の動きに象徴されている。例えば、山をスキーで下る時のリーベを支える手や、車を運転しながら、突然泣き出したリーベの左頬にさしのべた手。

又、リーベが、祖母にあげる、ふきたんばばを摘み取る場面でも、片手（左手）は手袋をとり、素手になって、寒さの中、冷い思いをすることをいとわない。リーベの小さな手は、祖母の手に、「お日さまの子ども」の花束を手渡した。

「復活祭」

復活祭は、325年、ニケーアの公会議で、春分の次の満月の後の日曜日に決めた、移動祝祭日である。太陽も月も、両方が、光満ちてくるのが、リーベのような子どもにも、目にみえてわかる日である。春の息吹が感じられ、自然の力がみなぎってくる時であり、祖母の生命も蘇り、病気も快方に向かうであろう。

ゲルマン人のOsternは、東から昇る光輝く曙の女神オステラ（エオストレ）という語源からきており、蘇る若々しい太陽を祝う祭り、春を迎える祭である。

キリスト教では、十字架の死から、光の子（太陽の子）キリストが、生き返り復活することを記念する祭典である。

習俗として、キリストの復活を喜ぶ太陽は三度躍り上がる、この朝、太陽のまわりで羊が踊っているのが見える、太陽の中に処女マリアが座っていて、天の祝福の花を撒く等がある。

この絵本の原題は、ノルウェー語で“PÅSKEMÅNE ØNSKESOL”であり、『復活祭の満月、太陽への願い』の意味で、日本語の「リーベとおばあちゃん」という題目とは異なる。絵本の始めに、リーベランドを白く照らす細い新月が、三場面に渡って少しずつ大きくはつきりと描かれ、それがだんだん満ちて大きくなり、満月になる。月と太陽の両方が、小さい子どもにも、光に満ちてゆく過程が、わかるように描かれており、月と太陽を主人公とした、生命の蘇りをテーマとした絵本と言うこともできよう。この絵本に描かれた「日の出」を楽

しみにして待つというテーマは、ヨー・テンフィヨールの文を原典とした絵本『ゆきとトナカイのうた』にも描かれている。「日本人の小学生3人に1人は、日の出・日の入りを見たことがない」との調査結果^(注2)があるが、陽光に恵まれない極北の地、ノルウェーの太陽の光を待ち望んでいる子どもとの違いを感じる。

さて、北欧では、太陽は、古くから、回転する太陽というイメージでとらえられ、例えば黄金の Trund Holm の太陽馬車(1100~1200DC, デンマークより出土)が有名である。又、青銅器時代の壁画では、太陽舟が描かれている。

文字化されたものとしては、北欧神話『エッダ』の中に、まずオーディーンは、月を運ぶ馭者^{マニ}Mani(男)を選び、次に、太陽を運ぶ馭者^{ソール}Dagr(女)を選び、半日遅れで馬にひかせたとあり、これが、月輪馬車と太陽馬車である。太陽をひくのはアルヴァク(早起き)とアルスヴィド(快速)という名の二頭の馬である。

このように、北欧神話では、太陽は女性、月は男性で表わされている。それ故、日の出の太陽に向かって祈るのは、女の子であり、祖母の生命を蘇らせ、守ることのできるのは、孫、それも同性の女の子の祈りでなくては成就しないのではないかと思われる。

又、祖母は、若かった祖父との愛を願ったが、リーベは、小さな子どもにもかかわらず、より高次元な生命の復活を祈ったことは注目に値する。

この絵本に、リーベの父母は登場する。しかし、祖母の病気がよくなるように、直接行動するのは、何故、父母でなく、一世代隔てた、孫のリーベなのであろうか。母は、祖母に飲み物を用意するし、父は、紫山までリーベと一緒にしてくれるが、日の出に、祖母の生命の復活を願い、祈るのは、小さな孫のリーベなのである。

祖母と孫のリーベには、親の世代をはさんで、大きな年齢の違いがある。この隔りが、直接的な生々しい関係でなく、余裕ある関係にしている。孫には、純真で、夢や目的に向かって突き進む、みずみずしい生命力がある。

それ故、祖母と孫、それも女の孫のリーベこそが、蘇ったばかりの、みずみずしい生命を共有できるのである。

「黒猫」

ところで、この絵本には、黒猫が三つの場面に登場している。ひとつは、リーベが、別棟の祖母を訪ねる場面で、黒猫も、雪の上に足跡を付けて、祖母の家に向かっている。二つ目は、次の頁の、リーベと祖母が出会い、祖母が原体験を伝える場面で、手前のブルーの椅子の上に、黒猫が前向きに座っている。三つ目は、満月の夜、リーベと父が、朝食をとり、紫山に登る準備をしている場面で、黒猫は、食堂の中央の椅子に、向う向きに座っている。

何故、直接ストーリーと関係がないのに、黒猫が描かれているのだろうか。まず、舞台が、

農場であるから、穀物をネズミから守る為という理由や、病気の祖母や幼いリーベの愛玩動物という役割は、当然、考えられるであろう。

しかし、表紙絵にもなった、二つ目の場面の手前中央で、こちらを睨んでいる黒猫には、もっと深い意味がありそうである。「猫のフォークロア」によると、古代エジプト文化では、猫の女神バストは、病気をいやす女神であり、太陽の使者であった。又、英語圏では、「猫は、九回生まれ変わる。」「猫には九つの命がある」と言われる。九は、北欧神話では、最も重要な数である。又、北欧神話「エッダ」では、大地豊饒の女神フレイアは、猫を崇拝しており、馬にひかせない時は、猫にひかせる戦車で出かけたとある。

この絵本が、復活祭の太陽に願いごとをして、祖母の生命の蘇りをテーマにしていることから考えると、上述の理由から、猫が選ばれたとしても不思議はなく、理にかなっていると思われる。

「ふきたんぼぼ」

復活祭近くに、リーベは、農場内の別棟に住む祖母の所に行くにも、ストックを持っており、スキーをはいた、雪の中の生活が日常の極北の地が舞台であることがわかる。スキーは、この近くラップランドに住む、サーメ人が、トナカイを追いかけて、すばやく移動する生活の中で、5000年も前に生まれたというが、リーベの生活も、様々の種類の雪を経験し、自然の中に溶け込むものであることがうかがえる。だから、復活祭の日、途中まで車で登った後は、紫山へ、北欧伝統の歩くスキー（クロスカントリー）で、長く険しい道を、父の後について登ることができたのである。

一般に、欧米では、復活祭には、ウサギが色とりどりの卵を運んでくると言われ、多くの絵本に描かれてきたのは、周知の事実である。

この絵本の舞台となった、雪深い、極北の地では、ウサギは、復活祭の頃になってもまだ雪の中に冬眠中である為か、長く厳しい冬の暗闇を破るものとして、「ふきたんぼぼ」が選ばれ、「お日さまの子ども」のようと描かれている。長かった冬の終わりに、雪の中から顔を出して、短い茎に、金色の花を咲かせて、春の訪れを告げている、この花（Tussilago）を、ノルウェー人を父にもつスウェーデンのエルス・ベスコフも、絵本“Görans bok”（1916）の中に、手をつないだ幼い子どもの姿で描いている。

復活祭の絵本に、春の訪れを告げる花（植物）として何が描かれているか、国際比較をしてみると次のようになり、絵本が生まれた風土が反映されており興味深い。

ドイツの“HASENBUCH”（1960）Freyhold絵、Morgenstern文では、水仙、チューリップ、クロッカス、ブローシッパ、ヒヤシンス、プリムラ。（注（3））

英国の「大うさぎのヘアーとイースターのたまご」（1983）アリスン・アトリー作、マーガレット・テンペスト絵、河野純三訳、評論社では、サクラソウ（酒）。絵は野生種の黄色

のプリムラ。(注(3))

アメリカ合衆国の“ The Egg Tree ” (Caldecott Medal Winner 1951) Katherine milhous文絵では、木蓮、チューリップ。

『ふわふわしっぽと小さな金のくつ』(1993) デュ・ボウズ・ヘイワード作、マジョリー・フラック絵、羽島葉子訳 パルコ出版では、芽をふきかけた月桂樹と、つぼみがふくらんでいるリンゴの木。

『うさぎのだいじなみつもの』(1998) シャーロット・ゾロトウ作、ヘレン・クレイグ絵、松井るり子訳 ほるぷ出版では、プリムラ、スノードロップ、アネモネ、堇、ブローシッパ等々、

スウェーデンの『ロッタのひみつのおくりもの』(1991) アストリッド・リンドグレーン文、イロン・ヴィークランド絵、石井登志子訳 岩波書店では、ブローシッパと、スノードロップ。

『おうしのアダムがおこりだすと』(1997) アストリッド・リンドグレーン作、マーリット・テークヴィスト絵、今井冬美訳 金の星社では、青いアネモネ、うす緑の若葉をつけた白樺。

ふきたんぽぽは、病気の祖母をなおす為に、大変なことをやりとげた、小さなリーベに、太陽がくれた奇蹟とも言えよう。同じように、病気の老人を助ける為に、臆病な孫が、勇気を出して頑張った時、奇蹟が起った、日本の絵本に『もちもちの木』(齊藤隆介作、滝平二郎絵、岩崎書店、1971年)がある。図版(3)

この二冊の絵本を比較してみよう。

祖母の生命の復活を願うのは、女の孫のリーベであるのに対し、64才の祖父の急病を救う為に行動するのは、5才の夜、便所にも一人で行けない、男の孫の豆太であった。

リーベは、病気で伏せている祖母の為に、母にたずね、満月の日までじっくり待って、父

の助けもあり、計画を実行する。これに対し、豆太は、祖父の急な腹痛に、感覚的、瞬間的に、一歩踏み出した。リーベのように自覚して、計画を練って実行したのではなく、祖父の為に、飛び出し、素足でねまきのまま走って、医者を呼びに行った。R. カイヨワが述べる、

図版(3)



日本人の瞬間の美学とでも言えようか。

リーベは、復活祭の曙の女神、太陽からの奇蹟のふきたんぽぽを見、花束にして手にすることができた。豆太は、山の神様の祭の、霜月三日の丑三つ時に、もちもちの木に火がとめるのを見ることができた。それは、犠牲を払い、献身した勇気ある一人の子どもしか見ることのできない、栄光の光ともいえよう。

おわりに

ヨー・テンフィヨールのノルウェー語が原典となった絵本「雪とトナカイのうた」では、冬の間丈、カウトケイノに住むおじいちゃんとおばあちゃんが、主人公の5才の女の子マリット・インガの家に来て、一緒に楽しくくらす異世代交流の様子が描かれている。祖父は、氷のはった湖で水を汲む方法を教えてくれたり、人形のゆりかご（コムセ）を白樺から作ってくれる。祖母は、寒い外から帰った主人公の為に、トナカイの脳みそのパンケーキや、トナカイのレバーを焼いたり、足先を煮たり、トナカイのシチューを作ってくれ、それらは、ほっぺたが落ちそうにおいしい。祖母は孫娘に、サーメの食文化を伝承している。

これに対して、リーベのおばあちゃんは、病気でベットの上にいる丈で、生産的な仕事はできないし、リーベに何か作ってやることもできない。しかし、お日さまのさす日を楽しみに夢みて、ただ、そこにいる丈で、小さな孫娘リーベを動かし、リーベを一段階成長させることができ、見事な異世代交流をしたことには、大いに注目すべきであると思われる。

今後、「老人と子ども」の異世代交流を描いた、すぐれた絵本（例えばエルサ・ベスコフ）を、柳田国男の民俗学、大藤ゆきの子育ての民俗学、折口信夫の翁論とも関連させて、更に比較研究してゆきたい。

<注>

- (1)「児童文学の中の原風景」お茶の水女子大学修士論文
- (2)平成10年12月4日、朝日新聞、文部省調査（小中学生の自然体験、生活体験活動についての調査）
- (3)ブリムラは、ラテン語で最初の意味で、ヨーロッパで春、最初に咲く花。

<参考文献>

- (1)「森からのプレゼント」ヨー・テンフィヨール作 トール・モーリス画、山内清子訳 偕成社 1992年
- (2)「ゆきとトナカイのうた」ボデイル・ハグブリング作絵 山内清子訳 福武書店 1990年
- (3)「猫のフォークロア」キャサリン・M・ブリッグズ著 アン・ヘリング訳 誠文堂新光社

1983年

- (4)『エッダ』V. G. ネッケル、H. クーン他編、谷口幸男訳、新潮社 1973年
- (5)『ヨーロッパ歳時記』植田重雄著 岩波新書 1983年